戎問抄

一日ある師匠
新屋ニ入
来ていろ伝
同屋中毛の
うちニ小有

人生長年
志学以道為
好士之要者
毎朝人定
弟子之所

中庸之教
とくとくの年時八
享保十七春作之
深川の教会庵素
いとくとの解

或人問曰長歌句ゝ切字入様
事如何ゝ細々と人ゝ
尋ねしに和歌ハ三十一字
切りて句ゝ上下をまとめ
天地となし陰陽となし
陽と陰湯合称して
一首となる句をわけ
十七文字なれとも是ハ切字を

天地開闢をはじめとの也
切字を用るゆへのこと
ゆされい別かゆるけるや
答曰けうこと事こゝいはす
志うこと詞よ垂水 歌のから
くりうと見又を掛やとく十七字
めよやといひすてる句なと也
いはくゆくこと句を二句ふる事

不地とは分一法陽を爲こと
いんや能く考こと不
へし切字といふハいふ大切の
事なり幽玄法京はいろは
四十余字切字なるぬハかしと
志免し亟ひしうこと
侍こ句の表よ切字ある句も
句うこと分れのか心切の理切を

なるべき作り方、玄妙の切なる事
南蛮流儀は厳旦初穂奉納
聞き嫁の新宅振舞
悪しくて賀乃類多く多
仕立て紙捻按作りて
響古なくしてもけり小行ぬ
多なり而論切といふ家
大切のもけなる事より當世

数多の宗匠流れをすまして
いつまへなるもの少なり指
初まる人てしく響古
なるへしいふ人賞多少と
推量よ志れぬるまてい
又問帳乃五種少ハ行く
てくや

答

歩行流附

雪かうしゝ山中寒むタ〻の郭
行方をたゞ物ふかゝ里

對附

名月や雲うゝ郭公とハかゝきゝ
卯の花やゝ雪ゝ雪や卯の花

遠山附

月やゝとうゝ月をうゝ月雪寒

海ゝゝゝ蛭山の紅のいろ〻

むら附

夏の夜の月を出ゆゝ夏の原
一掃りのゝゝゆふゝゝの雲

須留

梅咲ぬなる山里をたゝふる
仏の花の人ハ知ぬ

右のゝゝゝ貞徳雪吟菖蒲

等を洗白よハ多く連家を引
れゝくをいかゝ
結ふへし
又間脇てふを留の白きを下き
小とを又きこゝろとをそのか
の組名ふくをそれを除さて
そのふをうゝおく道和のゆへいき
てゝを留こゝ叶ひゝゝゝ作

をゝ結しくゝや
答ふる事あるすゝの組名を
乃ちて乃和の中えを白ハあさ
をのこてしたゝてふけの上き
なるゝ組ゝいたのをは撃古ゝの
へくゝ組しゝをゝある事ゝ
脇の大切ゝをいゝすき根情の秘事
中中事ゝゝいをを毎すてハ

むかしとをのはへくい
又同音之韵字留はむつかしき
やうにて歌作とういふまるの
結ん也
答曰当世之都にて用ゆる
とをの五ヶ條をうをいきの
うち事留をうをくとかなにて
曰事とをふ也事をよくてふは

いろは唯子多系ちりぬ初系
きりしをたれいつる類にて
留りは二字韵、二字韵なる中を
別のよはかくいたしにて亜い
文字にてはなるいをのかのかを
あれいにてはなるいをのかのかを
むつうしき事をなくい組
長頭丸表紙多白の紙

嘉祐末に天下に名聞なりし
とのりしかと是法とて勅宣
なりしなり不浄大切なる白法を
好こそある事にはいかに愛て結と
出来る事にはみて言語に述
ぶべからざる大切の口伝事多く
法を説ふまし出来しに
秘密の事になるべくは慎なるべ

結ぶ結ぶ結ぶまへて事に
むつりきさらのまを山の事に
秋なりの事に中の月も残り
夜白雪遠いくし
ふるさとの人くよし先哲
中絶されいらく奥の事に
清浄なるを入ていてと先
ちちやうよ初の事なる

ものうしへ心と大切の時はいつも
てをあやまるくはいと行草の俗流も
真を学ぶ者よくくい
作者くくい
又問曰句目を変ずるとは
なぜうしうけ移りはいか
ゆるや
答いかなる事よりおこりし

きくむさしやをふすまうたに
無一句を一巻感ずるもの
はへむ大切の場かわるこのゆう
解要ればいい
又問五句目はいのくはしいや
答句目を大切にはは敬
俳諧の教訓の歌をもぬるを
案をよかくとせよかくて

はを数て六句目七句目八句目
をよみ出しくみ出ぬいを概略
儒仏の教ふ事あきらめさとり
九句目十句目
重さ事ていとい
等のいいなれとそれ
句の渡て関の戸
るやうにはなれ

句やけくはしく句
事うるはしまず
十三句目
起情相合
撰古しはふへし又奇仙を
別のものあり春すいてあく
粗しるる句をたをしはりる
句くくはく一歩を付るう大切の

事なり揚句ををしてこん
へて寂句まて初こさいやうな
いとしてこそ一結風雅のは
中へくい附句ををしてこそ兼句
へこも通せたるやうなれしく乃
句ををて末くなる色のひも
れかしるを次の句へ兼釋
してあくくと表かるる

やうなるかと巻ふくはなこの影
へくいはくこさこのかをとするハ
附句とあ出しいを吟味して
心理乃ふるれぬやうて出へ
くとりやうよいを事
ふいの品門を踏出しこそ
大律まくく帰かくいゆめと
こそ世俗きこを角嵐雪

等へとも〻〻ゑ色ゑれ作う
つし品川ゑ宇箱根へ売ひ二宿
かゝ小田原へゑもう又ゑ一川
宿ゑ二日ゆる逗留しゆきゑハ
街道屈すゝうなりとはゆきれ
海し白き鶴この絵ゑして
上ゑ色下ゑ仕給ふ事よい
たく一枚成絵ゑゆをわか

蕉門ゑハ大切ふをしへらるい
絵〻世わを考へ作樵古
ゆるへく作
又岡心附理附とハいゑやなゑ
絵ゑゑゑや
蓉まゝ附やゑ十絵ゆいへゆ
い絵ふゆ曽ゑ八絵ハ平四年
風情遠對句理見ゑをゑゑ

風情附　[illegible]附　[illegible]

はけを[illegible]る事かゝる年意

きゝ相の二[illegible]ぬむとゝ[illegible]

[illegible]も[illegible]れ[illegible]世の

紙潔多くゝ相の潔[illegible]て

置場所[illegible]へし　組る[illegible]

は[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]たゝん[illegible]

[illegible]柄[illegible]るへ[illegible]　趣向珍

しき[illegible]費[illegible]ゝ[illegible]事[illegible]

[illegible]れ[illegible]ゝへ　理附

[illegible]ハ

[illegible]　[illegible]本[illegible]　[illegible]

甲製の[illegible]ハ[illegible]　[illegible]

又心附[illegible]ハ

[illegible]を記[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]人のみ[illegible]ありて[illegible]　[illegible]

大形うたのしくそなはりたる
白いろをゆるへられぬるもの
如何にして海の岩中赤い金を
考へそなさせらるへし
又問てふをたゝいて名を何とか
はなをやや
蓋 出葉と書くもの紙しくい
ゆれハ法花本を拓してハいつまの

本をもとめ出されぬ潮
書家て岩を張墨を出へて
そのあ拙をとるを出とを
てふをそなりて白のあ言ふふ
海をものゆへ海を天水拙まる
出作ヲ
見の書
又問てふそないろくの名行ハ

いつくや
答られハ数多くゆくちかいと
あゝ中盛しかくいてふたゝ
半書作本を見作へし
法白引いが二百千條をうもいる
やうゝうんしいうらよいえく
中さしたしくたかしたしてく
吳本うゝあるしうんを見くい

あゝしかうてうゝうして白を
附ふうあゝ古流ふく今ハ心附
理つけの二ハう附ゝ形ゝ
ゆくと口らんいるへくいうのうち
ゝ世てゆくうけてあくあれは
ゝとわるゝ事よいゝえくいる
へくいゝと〈へく歌ゝうてゝ
恵方へゆく露もけしる旭弁

義孝除目の夜

ちきりをかくはたしてむかさま
なりし上の白の衣をの下の白き
袴へきせかへてかれしさとはた九
くみ服白のかさねをはりふるしさ
ものをかしうさてはてあそびて
いとしくいと悪紙賀の帳をも
むはるくあらけなくてしみ

いるへくいと切の事をいはまさ
中の白まくをも
是は義風吳のわくるを思ひよ
指 宴くしてはしの状の事を
かやうの白者へあふへくをて
しるとつくきて大ていむ事を
西をくいとはなるへくしと遊者
懐田かをもとなるをていを問む

酒ふ雪の類させてみそうけてみそ
ふくくいを踏ふかへ又形猪
形ひちを此紙袋に毎日ふとも
なくく蕎麦あり なくくなれ
紙こうまこう梅のてみくしかおかや
うけくむ面白さ声笑なくへ
見て限りて賀の毎日中の白
ものくを玉柳なくなかへくる歩

祝や世とひくさくくさくくいむ
年なり年くつるのきろうけが
肝要にてしい
又問月毛を折毎に用ひ後を
京箱の家とのわそのうに人
中さくくさくくさくくきくの
家を建るへくふそのぬけ毎さ
きいるるるるるや

各自死を、糸物のたゝしにて
する事ゆゑ、死を待つまと死を陽
自を陰なるゆゑむかるくに見ハ
ゆれ折ることゆゑ陰陽
和合して一打調ふゆゑ陽数
陰数よく考へ見へし書を
四死、自ゆゑ名義の裏をも
自ゆれゆゑ、事をもつて合ゆ

ゆゑ陰陽ゆゑ死をうしなと
婦道のゆゑ、ゆゑを異し條
ゆゑ、ゆゑ角の書る物て義女を
笑ひしハ名なる死て同し
死ゆゑ時の死あり時を考
一数を考ゆゑ同し條乃
死を取宿の妻なきんのゆ
ゆゑ人ゆゑ時の死てゆゑ

[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
又問雨[illegible]身を[illegible]
[illegible]
答[illegible]の[illegible]
身の[illegible]
[illegible]

[illegible]
又問[illegible]の[illegible]
[illegible]
答先[illegible]の[illegible]詞の[illegible]類
[illegible]
[illegible]提来と[illegible]
[illegible]
又問菊桔梗撫子等の[illegible]

菊白し花に鶏頭ておのが花へ
移りよしいづれしよしとするか
とくはや
答これも誹諧の花なりてすむ
るすみは
又問しらずも實りし木なり咲は
花はなくぬるかふべや
答むつかしの事まらねやはたれぬ

おもしろき事なから一條よりわかる
ハ夏し松のとく草 季花
出ぬるを花をも見ゆるかたの楮の
あれ也くの高き花をいはしはなて
草木何りはまる
よられて志けらく花り別て鞠
おこしもして蹴ゆるる條りの別て
花おして草木またゆるましくは越解

なりし伝授ぶかやうの事を
中い事理の志のしぶ立ぬ
事を記うたぶ多ぶ明へらる條
大切のうてゆるをうかしぶ
口うするうてい先師へ乃誓約
かへるしと出入條
又岡稚義の事家うるあい入今
ぶうし義れ乃赤白ぶ海い

又柳梨海棠等の木うし咲い
花ふを見るの情のと高さ義を
いしとわうう立海しく
うんしうを出て六の場ぶいの
條や
答ぶしと大切うしいかい海
事ぶいて屋ううは統
事や海ぶ伝うう事お白

あとを破り給へなるぬ所のいとことに
所作なりとし
又問答の言葉をかけたつるこのおん白
まくをとらいい事を後くて
脇砂ーて次へゆつりとく形
とりやうをかさねて長くなる
世界をうかがいとを中い
作やうまるや

答なるとこと事をかり組
実を大切のようい表状を三白
とりをとり白まくはこさかるて
小方しの義を白と二白にて
仕舞い今すこし引あるおる
小くあるものを不出絵ある
事とかりやはとふ目おく
かりとれい事出れ入い

又問有て此歌を附ん事
かなうふしなり大切のゆゑ
條や
答ていはく重さ事あるべきにあらず
いてはいはくはかるべきものなりあるべ
てはいはく天然とゝまる場所なるものなり
又書の義なるゆゑ妹の服なりとも
はかるべきかなり事よい

みちの難て考て附べく
といふゆゑ
書の義なる義の條事を附べきなり
とゝまるべの附句なり是は蓮門乃
ゆゑなるはいはゆる史記れなり
又問義て條を附る事條疑
てはてうたてはかるべきなる
等なを添はへてゝ考べきなり

成りはいかゝや

答　けらしくさいふ事にはあらねども

能く稽古あるべく候花生

子細さへ勝て附やりも済まず

條根なし花根あり花なれど

いふ事をはまゝ掾鞘さらる貝

けらん人あらき津事くも

よくば大いの心合点まいるべくと

それは

又問　梅山吹等の花ける草木を

花むかしはたく八百萬なりとへ

よしいかゝあるしはや

答

梅若る寺比賀本の花けらり

山吹の歌く筏もしそれ見まり

こあり八百萬あるは

花散る春又ふる角夫来
見ふて西花のうらいまく君ほ吉
花とも事もい撃古一絲
へ
又問ナのふるとは何くてて
くや
答
ふ花ふるとハ

東海の名所彼れ関屋の絵むし絵
むまやふるとれとふるる
明石ふるとハ
発句合くくーやれとものつかめる
うかうれまー英吉の絵
かくるふるとハ
やすらくー寝かまー物をふ夢みて
かくまくの月をくーふる

時雨ふるとハ

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふ哉

常をふるとハ

雲の峯いくつくづくしたる風のうつるを

まつふるとハ

秋ふかしとハ

ゆくさきハ雲のかなたの秋ぞ

今一しほのもみぢをぞ見る

雪をくのゝとハ

ひとすぢに分こすちらして

人のいのちをたのもしの

寝ぬ夜ふるとハ

ぬぎ捨や老ぬ変れ衣のれしみを

むすしかうの山さくら

かんぢんのふるとハ

[illegible]

[illegible]

治定[illegible]

いろ〳〵の[illegible]の初のいと様

けふ九[illegible]ふ[illegible]ある[illegible]

初れ[illegible]ある滝[illegible]をうつ[illegible]

[illegible]のふて[illegible]白い[illegible]

ついなる事[illegible]

又問うさぶらとはいかゝなるゆよ

ゝや

答うくすつぬふむゆるゝ

はくれる[illegible]ふ[illegible]ゆる[illegible]す但し

[illegible]ふ[illegible]ゆ[illegible]

[illegible]へて[illegible]

はくさ[illegible]ふ[illegible]

又問やふ[illegible]とはどいそ[illegible]ふ

事にくるや
茶店の女白やの子考人ふ
へし
夕食や妹きいろくれふる色ふ
わらはや厨の背を拍根ふ
見交茶生後少事白ふし
五四揚句き重さ侍後ふ細は
後句ふ謝る事ふて後句

窓なるし揚句を窓一句いふい
事嫁傳ふふ人数へ中さわて
ふる事よふや
茶をしい大切のるゆへ行て
実事を後へられぬとふふう
一巻ふ服句ふ二付行てすむ
ふふふや多し大事ふは
ふふふふふふてはふく

たかはぐ雲さ申まてはよ
又同奉納の白いとゝやう作と
ゐらうけのゆういう社言葉
ゝゝや
答先正親白親白蹴白ゆき申
申うい傳書を見行る申て
蹴白き親白て始ゆう神魚
ゝもゆゆしく申ゝゝ

行ゆきゝれハ縱き人出ゆうへ
きつゝ帰ひ行ゝん申ゝ礼殿ハ
美きゝゝゆゝもけゝつきゆうゝも
立美ゝく書ゆ行きんハ出美彩ゆ
へゝといへるゝゝゝ事の高
なる時きゝうゝちくのさゆゝて
ゆゝゝも藤ゝうちゆゝゝきひき
ゆゝちゝてゝゝふゝゝいふ事ゝ

はし陰るゆふ[illegible]く静かなる時
いつのまにか[illegible]
少しづゝ[illegible]
[illegible]
なる時は親白むの作作親白
詠白の事は師[illegible]
[illegible]
志るべし[illegible]

せよと仰るけるよりは男[illegible]
初めすゝ[illegible]
をうしてうるべくは長頭丸出
戯墨記をるよ丸の父[illegible]七[illegible]
して[illegible]
毋日小注華[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちゑ多なりき凡そ魚鳥
ふしてその法師達ひ法道
四をかゝ苦しふうう今恵ふ
かゝふれ師の数百余人
及び新魚と冥加とかきき
ゝ一義を達をし悔しく
行り後世の定悟者あり
かへれく恥辱おうゝ

記しいるいつまも
義者ゝ苦さゝうゝ
一節小拾を整合るへき事
なりと行りかく古の人を人
相苦しいとをしぬして後の
人の嫌ゝ世ゝ
わるくれ知る人を人を
苦ふを恥乃やふれ知ゝ

いうなる所なりや問ハ高甲歴然
孤山の俗語流れたりし語を後
貞徳翁の説なり然るに高さハ
道を学ぶの要さハいとも
とうなく尤なりてもの
年忘れぬるとく門門
清のせいてうの意何
なるしさ色せうう

却ふてこ歴年まくとくし
まく人くく何事をするやと
うハ清みとさるる小坂殿と
なる松れうしてもうけを
和ぬ海ぶうのものをめうう
是亡所へ向り移を
ましと問雅を一周行う
ものうう行とやう雅しう

やうなれとうの師匠をもむ
れいさしゆ[illegible]同所
[illegible]師匠科のもとしいひ思ふ
高[illegible]ハ古人達をもとかしこ
[illegible]書家ハさしをやをすれて
[illegible]をもとうへし剣師[illegible]機畑
[illegible]んとふ四座の[illegible]

いふ霊源[illegible]やはら
[illegible]をもとめ一芸を多く
習ふとかあるすくれかけ
[illegible]
又問親白隠白の事武書を見
[illegible]ふ何の事をあきれ
お尋いうしい如
答うれハ甚深の事ゆへなて

乃りとらしより乾坤のうちハ
跡ありて少しく嫌古あるへくは
不審あらしれとも讃句一首章
中あへく人種会右大将家御
出陣の時召され河りして
和朝の為ふの軍とし召れ河
少将え陣立あられ親句なり
してめてられ句法之

君々縁ある小出り深りきん
此梶原か時の御船陣ありふれり
ぬらし従とあるにおけ分親句なり
して御利運の瑞勘陣ありし
なり又
夏山や出ひ出けれ山の新しき
是ハ畠山重忠夢家見事親句
歌読ら不老不俊ありて読ハれし

白く洗れいとを踏の白く出はれ
と顔を嗅をはなれうつ
咲かけて紅葉色をさそふ山ちう
見き事侍九月長崎師ふ子剣破
城貴人と射津の時の白なり時と
ふく一白きれ〳〵しを面白うり
うれいのとこうれまさ紅白さけうそ
けうしやれのかれなるん

と上墓源帝長崎紅いうしうれと
毅白けうさうふ甲製なる踏白
なりとうをを横面腰城中おて少
けうへ
咲けて紅葉いう足をよ山けうう
けうしハ髪の顔とをなるか
雲親白うて仕ふ自分の白と
いとを弁ううれて数美花美よ

[illegible]敗北して[illegible]利を
始しとく神[illegible]つゝる事
ふくのうしと紹巴の[illegible]の書
て要しく書記されたりと
始め今[illegible]始める事
[illegible]八的[illegible]日向守信長公の代を
[illegible]との旨なりられと尾切
の[illegible]旨[illegible]て山城合戦[illegible]を

切られ[illegible]ふ[illegible]月を[illegible]一年

又

[illegible]ハやうてのまさ[illegible]
[illegible]ハ大閤秀吉公異国へ御遠征
の時[illegible]信玄皆法[illegible]れ徳[illegible]
[illegible]分をとけ[illegible]ぬ[illegible]
事なし[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

はしるわけ[illegible]をけ
の[illegible]幽[illegible]新[illegible]を一句[illegible]
むらし味方を祝し歌をさら
はれ白言語[illegible]及ばざるを[illegible]
明くの[illegible]新[illegible]の[illegible]彩
るるものを同じ[illegible]
奉納新講をはじめ新[illegible]
[illegible]すしていはて神[illegible]

[illegible]ん[illegible]
[illegible]
又問義想ひとれのるはいかに
[illegible]
答いろ〳〵傳伝れとも要しくハ
[illegible]本[illegible]生[illegible]顔滿
[illegible]弟[illegible]白[illegible]上下
[illegible]

事ふかう師匠にうけて修古
ゆるへくは
又岡嶋潟に真行草はなりゆくと
きりはいくらくはや
答いうもとしられあると先本なると
こゝろいむ禮儀こゝにて第一き
高邑のはかりの大切事なるへし深
概意のまことむすくはくはこゝ

はなれの事題筆とうはうあひ
のもの懷紙の事初折この
折のもこの新家流の形式
もの賦物をしるしの事白
清やはもの花やう吟詠の
事遊ふへ白粉家のもの濃く
懷紙のうちやのもの濃こふし
もの書紙の事をみかく

ゆひつけまゝ連句を作つる事
ゝ下とゝまふ句吟べやうの事
為俳一句の式目八宗紙の二十文字
見おぼへ俳句大ゝ俳句
又ゝもの句を掟をいとうくお句を
ゝくゝ味へうちゝのかき
やうゝ体ゝ変化を
ゝ句ゝ

前句ゝりと句をすゝて
附句いゝんとおもへをくく
ゝるまゝ付ゝるふい深く性ゝ
たゝふへゝ
又問ゝ句を何ゝいゝたるゝ
ゝゝや百韻歌仙等ゝ上ゝくと
句合ゝゝ上の句ゝて為俳
事門弟ゝ師ゝ人ゝ

之門を表してのみをとゝのふる
いとゝや
茶天地人をいとまとれりしくい組
実に事を深長の工夫を行なう
根本をかくと嘗古ゆるへきい
ちはゝ事さに傳ハるる
ものゝへかうてふとゝいまふ
へゝ

又問俳諧いかゝふ都ゆるへくいつま
ゝ学ん入何をよりかうまいすり
ん人や
茶ゝ其ものゝ先師教へらま
しきを先茶古今をはし先
ゝの歌書茶ゝくの物語
等をおもむかゝ則茶をまみ
なゝし連歌を嘗古ゆるへくい

亦經書諸文化類動白潔書等
を抜り好むこと詩賦に劣れて
文章騈白等稽古いとすくし
佛法を尤く信仰し坐禪の形式の
事をしい書こと事を主つ称
さらり多くしと形式白佛り
て何の益ういい風雅を舞の先
なるものくいるへうり上手

器人のうさ白といふ事大うく
なるのうへの事を風流に作り
歩る事毎度見ふくまくい
神仏儒老莊等の書籍のかり
方を軍書廣大なる事を見れを
ひらめて佛の法制をん者いてり
なるへくく貞徳孝吟のうくり
人を百年りうちうち一人ノ二人

なくさきはるゝ海しこさく俤まさ
雅を見渡せばはるゝ雪かすみ
八一ふる通の者を測給ひなる分
をのこいかくやきくもすすこ
うちひろめる白をはやうて
ゆくしいがはるこはいかれいまさ
歟諸ゝく紙繪九種の中者
高知り給ひ分事をのから

まくさ語ふ水音をせぬとりふ
事ふ事なし和一毒所つく
れりしかるへくくもそうよ知て
きゝ事なり早意俗意を
風雅をもくゝ風流ゝ作つなを
事世道のわをなるへくいみ
煙風八蔭うち影るゆふへ分
秋ふ夕ゝ紙ちる夕暮

世二句ものかの質の結構とする俳諧
歌人の句をもて連俳をいひひらき
かくれなくかくれなく近くてかつ一句
にて心をもてる事なりの連
俳諧ハ詞をいひ事なく俳
句の俳力ハ詞をのこのこく
なりとく俳諧かしかしいハ
むかしなるへくいをもをんもの

をいひいとをもこ階やうをみをの
こここ一いんの句の詞の階の俳諧
かこまこまこかをはまをまこ
去れこのの俗をくくに伝ける
へくい
又問ていの字言葉こ俳ら作ら
くくや京人葉のこう俳くや
ける人の連こをいハ言葉ハいくい

ひの事にしてをいうもむてき
なり　古今の序にも書くの
書けりやまとのもの　れうらうにまれて
いくくや
答角仲なのかの事やむさし
ゝかゝりをおもひけりて翁けう
ゝふかうの書くきいうるる人て
いやさ代の師ゝさ所をいう

未世ゝかゝみと成へき古今う
いりてゝををいるやまとをなふへき
言葉ゝ作りをひしふき源く
重ゝさゝ和うけるげこれくく
考へ集をつしこけるゝ
へくい
又問ゝ人葉ハけくや
答いや人葉うるいとゝ事

てきかくい言葉人葉そのか
れもきこそ移るあるいは定家卿も
言葉ふも人葉てもあ侍り
けりしうしこはちく長頭丸
のお傘あるもしるもかれは
人葉て俳り中よ言葉て
作られしうれ事ふ侍るくれ
言葉りけやもりあるくはは

人くく何ともくもひ侍りんや
貞徳のつ下てきて乃大儒
林氏けり奇特者て、雪吟あり
てのかりけれ事ふ侍るくく
りなんそ小意もふかなる
字彙の表紙りけりしかへやや
誹諧の反切いつもふ侍るくく
てい芭蕉もうの月一生多く

人菊を作り嵐雪が点れて頂ふ
糟みのゝ庵書しむる時こを角て
示して言菊を作りしむ筆みの庵ふ
深き所存ありての事なり我
蕉門に之新枡といふものあり
此れらしてこを角を長こ
言菊を用ひ早うの人多く
言菊を作りこめられ作ものあり

ゆゑに作法かくこれらよいの
うまとうよいのとゆゑいふくい
とうもかくくうもうけまして御作
河井に用ひ作ふへし將上ふ
貴くこ宝家乃頂事もしゆきも
ないい歌と屏ゝんの事のやう
ゝて御と入ひをいい奇のるハ
重こ作ゝて御蛍園白殿下

四條ゟ住郷へ行きつるけり
おもしろきけるうしに出給へ十三せ
ばかりやかしら大切の事ゝくの
ものいうて義ふしも毒色りんや
今中ごろの御借き寺武ふ燈
長比丘を祖ゆしてとる僧
をしけるふとしたのをいふの
おくいよ

又問て武流ゟ中きたく白をすう
くとやとそうきいう寺ゆ年
人ゟかそんの屋うそうしいや
ゟりない

蓋中れよりて面の結う
世紙風ゟ十年を以ゟ
法ハ くくしく桃青ゟ

大内雛人形を見れば清宮かな

わらひ

めでたさや新の鶴のはたをかな

なつかしや古きの白をいとられ

梅翁かんとたんつまんの棟梁として

枝ゝなまめかしかんぐの高下さ

はりしを夢のごとなりけりかんの

桃書来蒙と家従わり今為

俳風うらわらるかりやゆ

之実神丹を煉る桃青うの

思ひ出うらわる人をしてすめ

らわるさうりうをかくの

話ゝものと

枯枝ゝ鳥のとまりやゆ秋の昏

ゆ一白を点られし花を

茶話の傳とゆゝ枝をうして

三部の外諸國を思ふ一流を
興させられけるのみ
世こぞいとくき俳諧の中
ありれも指別てうちわすけく
白けいさられもとも心理て
深き哀存のなれ白きけふ
なくいよ
名月やいを思ふく歌もすう

道をれむくけハ馬よ吟れうり
去れうる哀ふ味ふ味くしいやんの
如うけよくくけうる足まふ
へしに俳諧二十年をと
俳きまち上いくもけうを芭蕉翁
玉極くれはぐめ粉青して
十七の句法を定あられうたく
一すしまくとすると年

ひとふしうたうたひ十七の白拍子の内
てはけまよくくの舞ひいよ見ものを
立入くく拳を右かくしてはけらふ
あれくかうへくい舞くく考へく
見ものふへし又さ角と黒者との
舞風あるくものうといふ人はけう
上ゝていふくさ様は若は若
明くくらの舞風の中うらすく

いくやのあるものの姿をはり出られ
くくもくこさ角を見てはり法達を
法くく舞力を見し黒者は若者
白風を未くくはけんといふてを
うこうのくつ見うあ子舞乃
教を学ふくく白拍子おかく
提雑雲毫破分事れし
六れをうさ人別くはけを

ふへて俳の子のかたりふるく
宮苑をうしなひ老人苑をう
勤めてしかもふるの舟中
をうしなひくるり草庵を桃掛行り
門人に其角嵐雪をとゝとり
書れしうもきくの事ふく行る
うつしかと候へらるへくる
又問をいかいきかのあふいふす

事をいはやこの大意所変に
答うれし和歌を我国の風俗を
して神道の秘訣なるかふりや
うの徳を高さうは貴く筆を
揮ふくを思れうる連歌まく
六れよなうぬと俳諧は史記の
潤飾ようとなるとなる
事をいは漢土の滄干髭東方朔

西門豹等みかうつさ詭士ども
なり邑慧義もすくれたる賢
きうく雅正奇のかたり出ると
いへども心は向上の一路ふ拘ふ
書法をうり高徳と風流とは
盤渉かなりはしらたちをくく
半はうはしらをあらを今を見れを畧
しかるを所をとをは出常の

本道ハ初学之方ニ教ヘ諸人ニ教ヘ
ハ学ブ者ハ〳〵大道を志天下
泰平國家整御代長久ニ
する事よい宜質〳〵

享保十七歳三月日

江戸日本橋通一町目

松葉軒　萬屋清兵衛梓